

【やつし】 大家の若旦那とか若殿様などが遊女買いに金を使い、これに御家騒動が絡んで家を追い出され、姿を変え、身をやつして登場する役をいう。そして最後には、家来や遊女の働きと犠牲によって、元の家に戻るところで幕が下りる。

【和事】 恋をした男の姿を表現する演技や役のこと。恋に魂を奪われた男のおかしみ、やつし、恋人との色事、口説くぜつ（言い争い）といった芸の総称である。若々しくて勇猛な男を表現する江戸の荒事あらごとに対して、上方では和事が好まれた。

藤十郎の恋

菊地寛の小説『藤十郎の恋』より

本作品は大正8年に「大阪毎日新聞」に連載されており、後に小説として書き改めたものです。

小説の舞台は四条大橋の東、今の南座辺りにあったという茶屋「宗清」むねせい（主人は宗山清兵衛）の奥座敷となっています。登場人物は下記の二人。元禄10年（1697）頃の話です。

坂田藤十郎……上方歌舞伎の第一人者。傾城けいせい（女郎）買い・やつしの演技が十八番おはこ。

お梶……清兵衛の女房。美貌かつ貞淑で評判。昔は宮川町で随一と言われた歌妓うたいめ。

藤十郎「初めて遭った20年前から恋心を抱き、何度も言い寄ろうと思ってきた」

お梶「……………」

藤十郎「あなたは人妻となり、胸が張り裂ける思いであったが、非道なことは慎んできたのだ」

藤十郎「私も今年で45歳、この先それほど長くはない」

藤十郎「20年も堪え忍んだ恋を哀れと思うなら、一度だけでもやさしい言葉が欲しい」

藤十郎「これほど懇願しても、少しの素振りも示さぬとは……、あなたは気持の強いお人だ」

お梶「……………」

⋮

お梶「藤様、今おっしゃった事は、すべて本心ですか？」

藤十郎「どうして冗談など言うものか、人妻に云い寄るからには、命を投げ出しての恋だ」

⋮

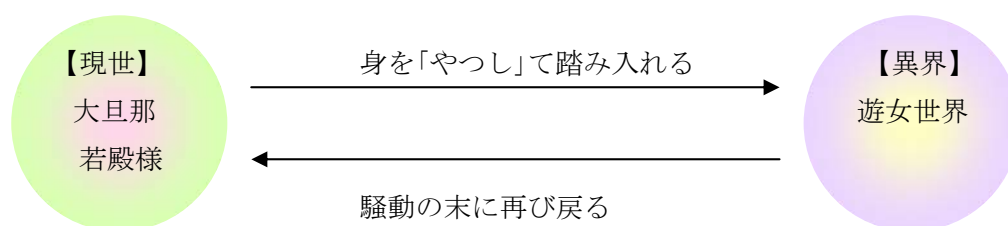
必死の覚悟を決めたお梶は、男の顔を一瞥いちべつし、傍らの行燈あんどんの灯をフッと吹き消した……しばしの間、恐ろしいほどの沈黙があり、やがて藤十郎が部屋を出て行く音だけがした……

つまり藤十郎は、お梶に偽りの恋を仕掛けたのです。新しい役(=人妻を口説く役……密夫みそかお)の勘所をつかむための演技であって、目的は果しました。おかげで彼の新しい役回りは大当たり、大評判となります。一方、偽りとも知らず、この誘惑に操を捨てようとしたお梶は、たとえ肌は交わさなかったにしても、その罪の恐ろしさは死に値すると考え、首吊り自殺をしたのです。

何てひどい男なの！との声が聞こえて来そうです。確かに、女性にとっては最も残酷な仕打ちかも知れませんね。でも、ご安心あれ、あくまで創作話ですから。トップ・スターの藤十郎にはこれに近い出来事は実際にあったかも知れませんが、これ以上の詮索は止めておきましょう。

藤十郎は元禄時代（1688～1703）を代表する、上方の和事の看板役者で、宝永6年（1709）に63歳で亡くなる。同時期の江戸歌舞伎では、市川団十郎が荒事で人気を博していました。

菊地寛の小説とは少し違うものの、藤十郎に関するエピソードが『歌舞伎事始』という書物に出ています。それによりますと、或る役を演じるに当たって、基本的な心の持ち方がつかめずに苦しみ、深夜まで稽古していた藤十郎が、何やら怪しい者（どうやら物の怪）の出現によって、たちまち勘所をつかんだという話です。実際には、藤十郎自身が神懸りの状態になって会得したというのが真相のようですが、誰かの役回りを演じるということは、技術的なものを超越して、何か霊的なものを身に纏うということかも知れません。「やつし」というのも変身には違いなく、変身の前後で世界が変わることになります。下図のように、現世と異界（遊女の世界）との間で行き来するため、そのような霊的な要素が加わるのでしょうか。



役柄の上での藤十郎は、言ってみればダメ男の代表格でもあります。一面ではモテ男です。女から見ても、どうしようもない男と思いながら、優しいところもあるし、放っては置けない。

観客の方では、これは劇なんだ、現実離れしているんだ、と頭の中では冷静に思いながらも、目の前で展開される劇に引き込まれ、感情移入してしまうのが普通です。個人差はありますが、いずれにせよ役者の術中に既にはまってしまっていると申せましょう。あくまで演技なのに。

男優が演じる ^{おんながた}女形 というのがあります。あれは、男が女を演じていると分かっているのに観客は女らしさを感じていますね。もし、声音も所作もすべて完璧に女性に似せて演じたなら、それは観客の人気を博したのでしょうか。おそらく、それだったら初めから女性が演じれば、という声が上がると思います。似て非なるものとは言いますが、その差はやはり大きい。

ドナルド・キーン氏（コロンビア大学名誉教授）は日本文学の造詣が深く、自身の博士論文においても近松門左衛門の『^{こくせんやかっせん}国性爺合戦』を対象としたほど歌舞伎にも実に詳しい方です。そのキーン氏が『能・文楽・歌舞伎』（講談社学術文庫）で記されていますが、氏が歌舞伎に開眼したのは京都の南座で顔見世興行の『^{じじんしゅう}曾根崎心中』を見た時（1953年11月）であり、とりわけ中村扇雀が扮する女形・お初の演技に神秘的な美しさを感じたとあります。本来は考えられない世界が、芝居の上では最大・最高の効果をもたらすことに驚かれたようですね。

勇ましい男性像からはかけ離れた「やつし」の男性が、男性扮するところの遊女を口説く演技、この本源的な秩序からは逆転した世界が、藤十郎が煩悶した末に創造した役回りでありました。

そうした彼の苦悩やエピソードが、『^{じじんしゅう}耳塵集』という書物などに記されています。

「身振り^{しんぶり}は心のあまりにして 然るに何ぞ 身振り^{しんぶり}とて外にあらんや」——これはその中の有名な言葉です。その意味は、芝居（演技）というのは役者の心の内が発露したものであって、演技だけが独立して形造られるものではない、ということです。

従来、役者というものは、仮にどのような役回りであってもそつ無くこなすタイプ、いわゆるオールラウンド・プレイヤーが多かったようです。その点、藤十郎は花車^{かしや}(=老女形)の名人・杉九兵衛について修業したので、他の役者とは異なるかも知れません。例えば、大小二本差しの武士を演じる時など、何ともしまらなくて、酷評されることもあったそうです。

藤十郎の名を一気に上げたのが『夕霧名残の正月』での演技でした。藤十郎31歳の時です。夕霧というのは、当時の大坂新町の遊郭で絶大な人気を誇った遊女で、病没したばかりでした。この時の藤十郎の役回りこそが、まさに「やつし」であったわけです。今日風に言えば、まさしく大ブレイクしたわけですが、藤十郎と「やつし」とは一体不可分のものとなったのです。

藤十郎の芸で、もう一点特筆されることがあります。それは「長いセリフ」であり「座り芸」だということです。確かに、座敷に上がって遊女と遣り取りをする場面が多いわけですから、自ずと座った姿勢での芸となりますね。そして、自分の身の上話を長々と相手に聞かせることになる。派手な動きは少なく、まかり間違うと観客を飽きさせてしまうので、演技者は大変なのです。

さて、藤十郎の芝居がこれほど受けた理由とは何だったのでしょうか。演技の工夫を除けば、やはり、元禄時代における商人階級を筆頭に、世の中全体が豊かになったということが大きい。要するに、余暇を楽しむことが出来たわけで、大富豪ともなれば芝居のスポンサーにもなった。或る者は、全盛の遊女の世界を垣間見たり、擬似体験することを楽しんでいたので。

実際、大仕掛けの舞台装置とか豪華な衣裳など、莫大な経費がかかる歌舞伎芝居というのは、いわゆる消費社会でなければ成立しないという要素があります。元禄バブルと呼ばれるように、経済成長期でインフレ気味の社会が芝居の興隆を支えていたわけです。そのために、元禄時代が終りを告げると、早くも下火になっていくのです。尚、これには幕府による規制がありまして、つまり、幕府は大商人の台頭を抑えようとしたのです。大坂は「天下の台所」と呼ばれて大商人も多く居たので、かなり狙い打ちにあったらうと想像できますね。

上記のような経緯で、初代藤十郎が亡くなって以降には、名跡を継承した二代目や三代目は、芸能史においても大きな業績を残してはおりません。残念なことで、淋しいことでもあります。ところが、ところがです、この由緒ある藤十郎が231年振りに復活することになったのです。本日30日より翌月26日まで、京都南座で「四代目坂田藤十郎襲名披露興行」が催されます。その栄えある継承者は三代目・中村鴈治郎【成駒屋】であります。そうそう、前述のキーン氏が見た女形というのは、中村扇雀と名乗っていた頃の鴈治郎その人なのですよ。

初代藤十郎が『夕霧名残の正月』で藤屋伊左衛門を演じた際、本当の紙で出来た衣裳・紙衣^{かみこ}を着て評判になり、以後、藤十郎の象徴になったとか。今回の襲名興行『夕霧名残の正月』でも、初代藤十郎が演じたと同じように紙衣の衣裳を着るそうで、これも注目されています。

* 江戸時代においては、大家の放蕩息子が勘当される時には、紙衣を着せて追い出されるという風習があったそうです。遊女からの手紙を貼り付けた衣が芝居では使われたこともあるとか。前評判も上々ですが、当日の興行においても「山城屋！」という声がかかると思いますよ。